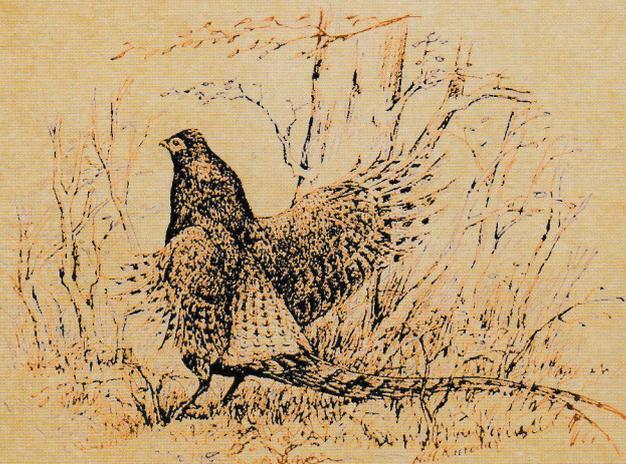


日本鳥学会誌

— 日本鳥学会100周年記念特別号 —

日本鳥学会 100年の歴史



日本鳥学会

The Ornithological Society of Japan

Vol. 61, Special Issue,
June, 2012

歴代会長の言葉

唐沢孝一（都市鳥研究会）

本会 100 年の歴史を語るにはいくつかの切り口が考えられる。その一つが本章の「歴代会長」を通して学会の歴史を顧みようとする試みである。言ってみれば歴代将軍を通して江戸時代を振り返るのに似る。しかし、学会でも幕府でも、組織はトップ一人で動くものではない。組織を支えるメンバーの支援と協力が不可欠である。本会の運営も評議員、会員の支持なしに会長の独断ではことは進まない。しかし、それでもなお、組織トップとしての責任は重くその言葉は 100 年の歴史を語るに足るものがある、と考える。学会という目に見えない組織も、所詮は「人」の集まりにすぎない。歴代会長を通して学会の歴史を振り返ることは、会員にとっても、今後の学会運営に携わる「人」にとっても、本会理解の一助になるものと思う。

過去 100 年、本会会長として 14 名が就任し、学会運営に尽力された（資料①）。それぞれの時代であって、どのような課題にどう取り組んできたか、あるいは鳥学についてどのような考え方をされたかなどを知ることは、これからの学会にとって貴重な財産になるにちがいない。しかし、歴代会長がどのような理念でどう学会運営に取り組んできたかを知る十分な資料があるわけではない。取り分け戦前の会長に直接お会いしたことのある会員も今ではごく少数である。また、50 年、100 年後の会員にとっては現会長といえども過去の存在となる運命にある。その意味で、100 周年記念にあたり「歴代会長の言葉」を記録しておくことは意義深いことであろう。

ところで、本会は 10 代会長の 1992 年 11 月総会で、それまでの「会頭」の名称を「会長」に変更した。そのため正式名称は、初代～9 代までは「会頭」、10 代では任期前半は「会頭」後半は「会長」、11 代以降は「会長」である。しかし、本章ではこうした煩雑さを避けるため、基本的には「会長」名を用いることにした。ただし、1～10 代に関しては伝統ある「会頭」名も併用している。多少の混乱や違和感があるかもしれないがご容赦いただきたい。

また、本章を企画した当初は、「会長の言葉」を執筆していただくか、それに相当する文章を過去の文献から選定する方針であった。ご健在である

9 代（中村司）～15 代（江崎）の 7 名については、会長時代に取り組んだ課題や思い等について執筆していただいたものを掲載することができた。しかし、既に鬼籍に入られた初代～8 代会頭に新規に執筆していただくことは叶わない。また、会頭就任時の抱負や学会運営等について所信を表明した適当な文献は残念ながら見いだせなかった。そこで、学会誌に掲載された追悼文（号）や著書などの資料（資料②－文末参照）を参照し、新たに「会長の紹介」を執筆した。本章が「会長の紹介」（初代～8 代）と「会長の言葉」（9 代～15 代）という二つの異なる内容から構成されているのはそのためである。初代～8 代会頭については、資料に基づいて可能な限り客観的な紹介に努めたつもりではあるが、不十分な点についてはご容赦いただきたい。また、掲載した会長の写真は初代～8 代は学会誌や書籍等で発表された印刷物から引用し、9 代以降は本人から提供されたものである。5 代山階会頭の紹介は、中村司氏の文案をもとに資料的な裏付けを行うなどして一定の形式に書き改めた。資料①の作成と資料②の収集にあたり鶴見みや古氏の協力を得た。記して感謝の意を表したい。

学会の歴史と会長

本章の編集を通して学会の歴史と会長に関して気づいた点を取り上げ、若干の補足をしておく。

- (1) 学会は 1912 年に発起人 7 名で発足し、初代会頭に飯島 魁（東京帝国大学動物学科教授）が就任した。2 代（鷹司）・3 代（内田）・4 代（黒田長禮）の 1963 年までの約 50 年間はすべて飯島教授の指導を受けた弟子であり、学会設立発起人である（「会頭の紹介」初代～4 代を参照）。
- (2) 初代～6 代（1912～1975）の 64 年間は、公家（2 代鷹司）・旧大名（4 代・6 代の黒田父子）・皇族（5 代山階）の出身者が大半である。会員の中にもこうした身分の者が多いことから世間的には「貴族の学会」と映り、いわば特権階級の学会の様相を呈していた。しかし、それゆえに学会の水準が維持され、貴族の支援をえて戦前戦後の経済的困難な時代を乗り越えることができたという側面もあった（「会頭の紹介」4 代、6 代を参照）。一方、戦後は華族制度の廃止

資料① 歴代会長と在任期間（1912年～2011年）

| 歴代 | 氏名 | 名称 | 在任期間 | 在任年数 | 補足 | 備考 「」内は就任日～交代日 文献は就任時を記す。 |
|----|-------|-----------|-----------------|---------|----|--|
| 1 | 飯島 魁 | 会頭 | 1912.05-1921.03 | 8年10ヶ月 | ※1 | 「1912.5.3（学会創立）-21.3.14（逝去）」 |
| 2 | 鷹司 信輔 | 会頭 | 1922.05-1946.11 | 24年6ヶ月 | ※2 | 「22.05.16-46.11.23」就任・鳥38(12/13): 158 |
| 3 | 内田清之助 | 会頭 | 1946.11-1947.05 | 7ヶ月 | ※3 | 「46.11.23-47.05.31」就任・鳥12(56): 28 |
| 4 | 黒田 長禮 | 会頭 | 1947.05-1963.03 | 15年10ヶ月 | | 「47.05.31-63.03.15」就任・鳥12(56): 40 |
| 5 | 山階 芳麿 | 会頭 | 1963.03-1970.04 | 7年1ヶ月 | ※4 | 「63.03.15-70.04.01」就任・鳥18(81): 23 |
| 6 | 黒田 長久 | 会頭 | 1970.04-1975.05 | 5年1ヶ月 | ※4 | 「70.04.01-75.05.25」就任・鳥20(88): 68 |
| 7 | 古賀 忠道 | 会頭 | 1975.05-1981.06 | 6年1ヶ月 | | 「75.05.25-81.06.07」就任・鳥24(97/98): 66 |
| 8 | 黒田 長久 | 会頭 | 1981.06-1990.04 | 8年10ヶ月 | | 「81.06.07-90.04.08」（辞任）就任・鳥30(1): 52 |
| 9 | 中村 司 | 会頭 | 1990.04-1991.09 | 1年6ヶ月 | ※5 | 「90.04.08（代行）-90.10.14（会頭）-91.09.15」就任・日鳥誌39(4): 121 |
| 10 | 森岡 弘之 | 会頭・ 会長 | 1991.09-1993.10 | 2年2ヶ月 | ※6 | 「91.09.15-92.11.22（名称変更）-93.10.10」就任・日鳥誌40(4): 151 |
| 11 | 山岸 哲 | 会長 | 1993.10-1997.12 | 4年3ヶ月 | ※7 | 「93.10.10-95.12.31（移行措置）-97.12.31（選挙で選出）」 |
| 12 | 藤巻 裕蔵 | 会長 | 1998.01-2001.12 | 4年 | ※8 | |
| 13 | 樋口 広芳 | 会長 | 2002.01-2005.12 | 4年 | | |
| 14 | 中村 浩志 | 会長 | 2006.01-2009.12 | 4年 | | |
| 15 | 江崎 保男 | 会長 | 2010.01- | | | |

※1) 飯島会頭逝去（21.3.14）の後、22.5.16まで会頭職は空白。

※2) 2代（鷹司）は評議員会（22.5.16）の推薦で就任。ただし、「鳥」創刊～55号（44年）の会則に会頭選出方法・任期を定めた条項は見当たらない。

※3) 3～4代、7代～11代（前半）の会頭（会長）の選出は、評議員会で推薦し、総会での承認をへて決定した。鳥12(56)、鳥14(68)、鳥24(97/98)

※4) 5代、6代の会頭の選出は評議員会で選出して決定。鳥20(88): 68-69。63年会則に「役員は評議員会において定める」とある。鳥18(81): 76

※5) 8代（黒田）は評議員会（90.4.8）で辞任表明。副会頭（中村司）が会頭代行。総会（90.10.14）で中村会頭が承認された。日鳥学誌39(4): 125

※6) 92年度総会（92.11.22）で「会頭」の名称を「会長」に変更（会則5条2項の改訂）。鳥41(3/4): 65

※7) 11代（山岸）は93.10.10の総会で承認・就任。95年7月の会員による選挙で「96・97年会長」に選出。総会で承認。任期は「96.1.1～97.12.31」

会則変更に伴う移行措置「93・94年度の会長（任期2年）を93年10月10日～95年12月31日の2年3ヶ月とする」日鳥学誌42: 37

※8) 12代以降は、会則9条により「会長は会員による直接選挙で選出され、任期は2年。連続して3期を認めない」

や会員増加等に伴い貴族的体質はしだいに薄れ、消失した。

(3) 現在の会則（1996年施行）では、会長は会員による直接選挙で選出され任期は2年、連続3期は認められていない。しかし、本会発足（1912年）当時、会頭がどのように選出された

かの記録は見あたらないし、当時の会則に役員の選出方法は記載されていない。おそらく創設会員による互選で選出されたものと推測されるが、会はそれで機能していたと思われる。2代（鷹司）は評議員会の推薦で就任している。3～4代では評議員会で推薦された候補が「総会の

承認」をえて就任した。5~6代では評議員会で選出されて就任している。7~11代では評議員会で推薦され「総会の承認」をえて就任する方法に戻った。会長が「総会」や「評議員会」で決定される場合は、総会や評議員会の開催時期が年により異なるため在任期間が表②のように不揃いとなり一定しない。表②では、資料を精査し会長の在任期間を月単位で示した。

- (4) 会長在任期間は、初代(飯島)~4代(黒田長禮)までは8年10ヶ月~24年6ヶ月と長期にわたる(ただし、戦後の動乱期であった3代内田の7ヶ月を除く)。5代(山階)~8代(黒田)も5年1ヶ月~8年10ヶ月(平均6年4ヶ月)とやや長い。黒田(久)は6代と8代の2回就任しており、個人としては約14年に及ぶ。このような長期になった原因としては、会員数が少なかったこと、会の貴族的体質や会則に多選禁止などが明記されていなかったことなどが上げられよう。9代~11代(前半)は学会の改革の時期にあたり在任期間は約2~4年であり、12代以降は現行会則に基づきいずれも4年である。
- (5) 学会の歴史は改革の歴史でもあった。「貴族の学会」を見直し、学会の改革を模索するさまざまな検討が8~9代の時期になされた。会長や評議員の選出方法、財政の建て直しなど本格的な改革に取り組んだのは10代(森岡)であり、その改革の流れを11代(山岸)が引き継ぎ完成させ、さらに12代(藤巻)へとバトンタッチした(「会長の言葉」10代、11代、12代を参照)。
- (6) 学会は機会あるたびに会員の質的向上や国際的な交流に努めてきた。国際鳥学会への若手の派遣、若手研究者の育成に果たした基金の役割も大きい(「会長の言葉」11代・13代を参照)。一方、最近では研究者の国際交流、共同研究などが一段と活発となり、研究の国際化・グローバル化が著しい。そうした流れの一つが2014年のIOC日本招致である(「会長の言葉」14代を参照)。日本での鳥学の将来について15代(江崎)は、明治以降の鳥学の歴史を振り返りつつ、日本としての「研究の独自性」「理論を手にしたOrnithology」など示唆に富む提言を行っている。

最後に、1~8代の「会長の紹介」の執筆を下記のように行った。

- (1) 歴代会長名は歴史上の人物として扱い、「敬称」を省いた。

- (2) 父子で会長を務めた「黒田長禮」「黒田長久」の両氏を区分する必要がある場合は、「黒田(禮)」「黒田(久)」とした。
- (3) 資料により客観的な事実が確かめられている事項(生年、誕生地、学歴、職歴、研究業績等)に関しては本文中には出典を示さず、参考文献を掲載するに留めた。「引用文や引用語句」は文中に出典を記した。
- (4) 参照・引用した文献は資料②としてまとめて別掲した。
- (5) 初代~8代会長の出身大学である「東京大学」の名称は概略として以下のように変遷した。1877(明治10)年4月、「東京大学」として誕生。1886(明治19)年、帝国大学令により「帝国大学」に改称。1897(明治30)年、京都帝国大学の設立にともない「東京帝国大学」と改称。戦後、1947(昭和22)年、新制「東京大学」となる。本章でもこれに従った。

資料② 「初代~8代会頭紹介」に関する引用・参考文献

歴代会長と鳥類生態学全体の潮流に関する文献

山岸 哲(1997)日本の鳥類生態研究。樋口・森岡・山岸(編)日本動物大百科第4巻鳥類Ⅱ:6-9。平凡社、東京。

初代会頭 飯島 魁

日本鳥学会(1921)紙碑、会頭飯島先生を悼む。鳥15(11)。

上野益三(1988)飯島 魁、動物学の基礎を築く。木原・篠遠・磯野(監)近代日本生物学者小伝:111-119。河出書房社、東京。

2代会頭 鷹司信輔

黒田長禮(1959)元会頭鷹司信輔博士を弔う。鳥15(73):101。

内田清之助(1959)鷹司さんのことども。鳥15(73):106。

松永安衛(1959)思い出。鳥15(73):111。

池田真次郎(1959)故鷹司信輔博士を悼む。鳥15(73):114-115。

黒田長禮・黒田長久・中西悟堂(1959)鷹司博士論著その他。鳥15(73):119-124。

柏原精一(1988)飼育を科学にした鳥の侯爵。『科学朝日』(編)殿様生物学の系譜:104-116。朝日新聞社、東京。

3代会頭 内田清之助

黒田長久(1976)内田清之助先生の追憶。鳥(99):3。

松山資郎(1976)内田清之助先生の思い出。鳥(99):6-7。

松山資郎(1988)内田清之助:鳥学を広め、保護思想を普及。木原・篠遠・磯野(監)近代日本生物学者小伝:399-402。平河出版社、東京。

唐沢孝一(1998)「鳥獣報告集」復刻版の刊行に当たっ

て。唐沢(監)鳥獣報告集(別巻):5-13。皓星社、東京。

4 代会頭 黒田長禮

- 黒田長禮(1927)日本鳥学発達史。自然科学2(2):2-57。
 蜂須賀正氏(1949)黒田会頭の文献集。鳥12:218-261。
 山階芳麿(1978)黒田長禮博士を悼む。鳥27:84。
 J. Delacour(1978)A Tributeto Dr. Nagamichi Kuroda. Tori
 27:81-82。
 古賀忠道(1978)故黒田長禮名誉会頭の業績をおもう。
 鳥27:87-88。
 森岡弘之(1978)黒田長禮博士を悼む。鳥27:89-90。
 中西悟堂(1988)黒田長禮、国際的視野に立った鳥学者。
 木原・篠遠・磯野(監)近代日本生物学者小伝:469-475。
 平河出版社、東京。
 柿澤亮三(1991)カンムリツクシガモの発見—黒田長
 禮。『科学朝日』(編)殿様生物学の系譜:117-128。
 朝日新聞社、東京。

5 代会頭 山階芳麿

- 山階芳麿(1984)私の履歴書。日本経済新聞社。
 山階芳麿インタビュー記事(1985)鳥類研究60年を語る。
 JANUSTODAY(11):2-5。
 柿澤亮三(1988)細胞遺伝を分類に持ち込む—山階芳
 麿。『科学朝日』(編)殿様生物学の系譜:91-103。
 朝日新聞社、東京。
 黒田長久(1989)山階博士の鳥学への貢献。鳥37:151。
 森岡弘之(1989)山階芳麿博士の人と業績。鳥37:
 154-155。
 浅野長愛(1989)山階芳麿著「私の履歴書」から。日本
 生物地理学会会報44:ix-xii。
 中村 司(1989)山階芳麿先生の学問と私。山階鳥研報
 21:148-150。

山階鳥研 NEWS(1999)NO.118(1月1日号)。

6 代・8 代会頭 黒田長久

- 柏原精一(1988)博物学家系のアンカー—黒田長久。
 『科学朝日』(編)殿様生物学の系譜:214-225。朝
 日新聞社、東京。
 黒田長久(1987)大会雑感、その将来に向かって。鳥学
 ニュース(25):1。
 中村 司(2009)黒田長久先生を偲んで。日本生物地理
 学会報64:1。
 森岡弘之(2009)黒田長久博士を悼む。日鳥学誌58:
 213-215。

7 代会頭 古賀忠道

- 古賀忠道(1950)趣味に生きるまで(「動物と動物園」)。
 『古賀忠道 その人と文』(1988・非売品)p.84-87に
 収録。
 古賀忠道(1969)「自然と野生動物」。『古賀忠道 その
 人と文』(1988・非売品)p.70-81に収録。
 黒田長久(1986)古賀さんの思い出のままに。どうぶつ
 と動物園38(9):12。
 中川志郎(1986)古賀先生を偲んで。鳥35(2/3):85-86。
 福田道雄(1986)古賀先生の思い出。鳥35(2/3):86。
 小森 厚(1988)古賀忠道先生年譜。『古賀忠道 その人
 と文』(非売品):271-298。
 古賀忠道先生記念事業実行委員会(1988)古賀忠道 そ
 の人と文(非売品)。
 古賀忠道先生記念事業実行委員会(1988)古賀忠道先生
 著作一覧。『古賀忠道 その人と文』(非売品):299-
 300。
 大村秀雄(1988)国際捕鯨会議とペンギン。『古賀忠道
 その人と文』(1988・非売品):157-159。